

今もインドの生活に息づく神話

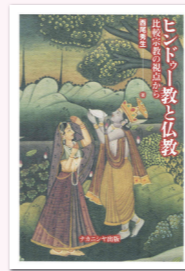
インドは人口が中国について世界第2の大国です。また、経済的にも著しい発展をとげているので日本との結びつきは大きいのですが、人々の生活についてはあまり知られていません。インダス文明発祥の地で歴史も古いインドは、受け継がれてきた神話も多く、さらに世界中の神話にも影響を及ぼしたと考えられています。今回は、5月から新たに始まった講座「インド神話1」を担当されている講師の西尾秀生さんにインドの神話と生活について聞きました。



西尾 秀生（にしお ひでなり）

大阪大学大学院文学研究科修士
元オックスフォード大学東洋学研究所客員研究員
元近畿大学文芸学部教授
公益財団法人中村元東方研究所研究員

「ヒンドゥー教と仏教—比較宗教の視点から」
ナカニシヤ出版等、著書多数



「ヒンドゥー教と仏教—比較宗教の視点から」
西尾秀生著



「インド神話 マハーバーラタの神々」
上村勝彦著



「クリシュナ物語」
ラマナンダ著・若林千鶴子訳

■生活の中に生きているインド神話

大学院でインド哲学を専攻し、哲学やヒンドゥー教の文献を研究しました。その後、インドのアディヤール研究所に留学することになり、現地でヒンドゥー教の寺院や聖地、仏教の遺跡などいろいろまわりました。一般のインドの人々はある程度ヒンドゥー教の教義やインド哲学を知っていると思っていたのですが、ほとんどの人々はそういった知識はありませんでした。しかし、聖典にでてくる神話は実際にあったことだと信じているのには驚きました。そこで、以前のように教理や哲学書を読んでいるだけではインド人の本来の思想や信仰が理解できないと考えて神話の研究を始めました。幸い研究所には世界に2つしかないめずらしいクリシュナ神話の写本の1つがあったものですから、最初はクリシュナ神話を研究しました。それ以降たくさんの神話を研究するようになりました。

インド神話の面白さは、何といっても「生きている神話」だということです。もともと神話は古代人の宗教と密接に結び付いていましたが、現在の欧米人や日本人は神話を事実とは信じていません。一方、インドでは神話に出てくる神々を多くの人が熱烈に信じています。インドの人たちの心の中には今でも神々が生きているのです。

■インド神話にはどうしてたくさんの神々が登場するのでしょうか

インド神話は非常に古く、「リグヴェーダ」は約3300年も前のものです。その頃アーリア人は自然現象を神格化した太陽神、月神、雷神、風神、火神、地神など多くの自然神に賛歌をささげました。そして、人々の生活の変化につれて新しい神々を加えられていきました。その後「マハーバーラタ」と「ラーマヤナ」という二大叙事詩が完成しました。これ以後はヒンドゥー教の神話の時代になります。このころの神話には先住民の神々も影響し、正当化されていきました。ヒンドゥー教ではヴィシュヌ派、シヴァ派、シャクティ（タントラ）派の三つがあります。ヴィシュヌ派なら神の化身（アヴァターラ）、シヴァ派ならシヴァ、シャクティ派ならドゥルガー女神などが活躍する神話为中心になります。けれどもそれぞれの派の神々は、系統的に説かれたものではないので、話が矛盾していたりします。

■インド神話と日本神話の類似点は

日本とインドは両方とも多神教ですし、自然現象の神格化という点もよく似ています。また、神話の内容においても「ラーマヤナ」と「古事記」は、似ています。「古事記」では、木花佐久夜毘売が^{このはなのさくやひめ}遍^に遍^に藝能命と結婚しますが、当時は一夜婚、一晩一緒に過ごすだけです。木花佐久夜毘売は妊娠しますが、遍遍藝

能命は一晩だけで妊娠するのかと疑います。そこで木花佐久夜毘売は、潔白を証明するため産屋を土で固めて火を放って三つ子を出産します。

インドの「ラーマヤナ」では、ラーマ王子の妻シーターは悪魔に誘拐されてランカ島（スリランカ）へ連れて行かれます。そこで悪魔は妻になれとせまるのですが、シーターは拒絶しつづけます。ラーマは猿の軍隊を味方にして救出に向かい、悪魔を殺してシーターを救出します。しかし、長い間他の男と宮殿で暮らしていたので、シーターの貞操を疑い、妻にむかえようとしませんでした。シーターは身の潔白を証明するために火の中に入ります。火の神アグニがシーターを抱きかかえて出てきて潔白を証明します。そして、ラーマは喜んでまたシーターを妻にむかえ、インドを支配します。さらに、シーターは双子を生みます。このように、火の試練で身の潔白を証明したり、多胎児を生むという類似点があります。

古事記編さん以前に仏教は日本に入っています。「六度集経」にラーマヤナの話が入っており、当時経典を読める人は限られていましたが、日本神話の編さんに当然影響したろうと考えられます。その他、ラーマを応援した、猿のハヌマンは巨大な風神の子です。だからインドからスリランカまで飛んで行って戦ったのです。これは「西遊記」の孫悟空に影響したと思われる。

またヨーロッパや中国の神話との関係ですが、インドの天空神ディヤウスはギリシャ神話のゼウスであり、ローマ神話のユピテル（ジュピター）です。さらにインドの祖先神、最初の人間はマヌですが、ゲルマン人の祖先神もマヌです。このように語源的に同じ神が見られるのは、インド・ヨーロッパ語族が分裂以前に持っていた神話が残ったからです。

それから、インド神話にはブルシャという原人の解体神話がありますが、中国神話の盤古や北歐神話のユミルなどと同様に巨人解体神話です。また、伊邪那岐から天照大御神と月読命と須佐之男命が生まれる日本神話にも似ています。

■インドの人々の生活と神話について

毎年アーシュヴィン月（9月～10月）にドゥルガー・プージャーという祭りが行われます。特にベンガル地方で盛んなこの祭りはドゥルガー女神がマヒシャという水牛の姿をした悪魔を退治した神話を再現したものです。昔、神々とアスラ（阿修羅）たちとの戦争があり、強力なマヒシャを倒すために神々は自分たちのエネルギーを集めました。その中から誕生したドゥルガー女神はアスラの王マヒシャに襲いかかっ

て殺し、神々に平和をもたらしました。ドゥルガー・プージャーでは水牛の悪魔を殺す女神の像を10日間安置します。この期間は女神が像に宿っていると信じられています。祭が終わると女神は像から離れるので、ガンジス川や近くの川まで運んで水に流します。もともと土をこねて作った像なので水に溶けて流れます。

それから、ガンジス川の沐浴も川の女神の信仰からきています。ガンジス川は天界にいた女神がヒマラヤから降りてきて流れている聖なる川です。女神に失礼だから裸で川に入ってはいけないのです。男はドーティ、女はサリーを着て入ることができると信じられています。これも神話が生きているからこそ続いている儀式なのです。

■インド神話を楽しむ方法

日本で出版されたインド神話の本は少ないのですが、入門書としてふさわしいのは上村勝彦著「インド神話 マハーバーラタの神々」（ちくま学芸文庫）です。インドでは子ども向けにクシュリナやラーマの物語がたくさん出版されています。クシュリナの神話は、地上に悪魔が増えて善良な人々が苦しんでいるときに、ヴィシュヌ神の化身としてクシュリナが地上に降臨して悪魔を滅ぼす話です。日本では、ラマナンダ著・若林千鶴子訳「クリシュナ物語」（蝸牛社文庫）が出版されています。



ガンジス川の沐浴風景（ヴァナラシ）

神話は古代の人が彼らの世界を説明したものであったり、歴史的事実を反映したものであったり、その民族の文化（たとえば作物など）の起源を伝えたものであったりします。神話を解釈することは神話の理解を深めることにもなります。このように神話が何を伝えようとしてつくられたかを考えることも神話を楽しむ方法でしょう。

日本神話には朝鮮半島や東南アジア、中国南部の神話と類似したものもたくさんあります。大陸から伝わったいろいろな神話が融合して「古事記」としてまとめられたと思われる。日本の神話を世界の神話と比較して読むのも神話を楽しむ良い方法だと思います。

インド神話は馴染みがないように思うかもしれませんが、経典などを通して日本の神話や説話に大きな影響を与えています。そう考えると、インド神話が少し身近に感じられるのではないのでしょうか。



ドゥルガー・プージャー
沖守弘写真集
「インド・祭り」(学研)